

安達太良火山沼ノ平火口の1997年5～6月の状況*

The state of the Numanotaira crater of Adatara volcano
on May to June, 1997, NE Japan

地質調査所**

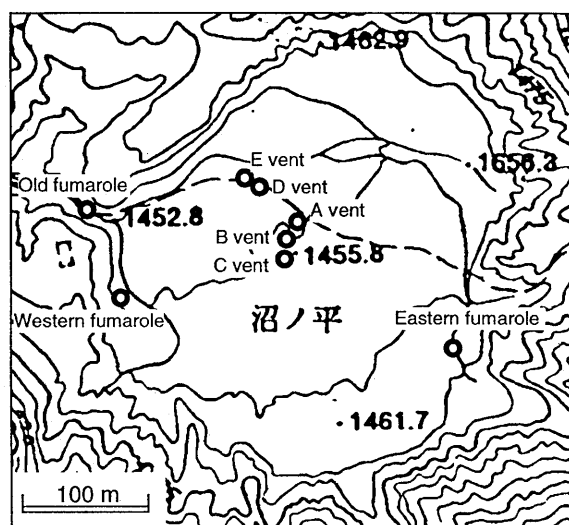
Geological Survey of Japan

1. はじめに

福島市の南西にそびえる安達太良火山では、山頂部の沼ノ平火口（径約1.2km）において昨年から泥の噴出がたびたび起きている。有史の火山噴火（水蒸気爆発）はこの火口内で起きており、特に1900年の水蒸気爆発では、火口内の硫黄採掘所にいた72名が死亡する惨事となっている。1950年に小規模な噴煙が観測された後は、特に顕著な異常は報告されていなかったが、1995年10月以降6回の火山性微動が観測開始以降初めて観測され、火山活動の活発化が懸念されている。地質調査所では5月～6月に沼ノ平火口の現地調査を行ったので、その結果を簡単に報告する。

2. 活動の経過

沼ノ平火口での泥の噴出は、すくなくとも1995年10月から1996年4月にかけての時期から始まっていたことが気象台の定期観測等で確認されている。その後、9月1日には火口中央部（C噴出口：第1図）で直径約100mの範囲に泥を飛散させた小爆発が起き、直後の噴煙の写真が地元の登山ガイドによって撮影されている。1996年9月16日の現地調査では、沼ノ平火口中央部に3個の噴出口とこれらから流出した堆積物を確認したが、新噴出口からの泥や火山ガスの噴出はなく、静穏な状況であった。



第1図 沼ノ平火口における泥噴出口・噴気口の位置（1997年5月26日現在）

Fig. 1 Location map of vents and fumarole in the Numanotaira crater on 26 May, 1997.

* Received 8 Aug., 1997

** 山元孝広
Takahiro Yamamoto

3. 現地調査結果

1997年5月26日に沼ノ平火口底に降り、噴出物の採取・ビデオ撮影・温度測定を行った。96年に泥噴出のあった中央部のA・B・C噴出口は観測時も活動を停止していたが、火口底北西部に新たな噴出口が出現しており、盛んに泥と火山ガスを噴出していた。また、火口底の東縁部と西縁部でも噴気が活発化しているのが確認できた。

旧噴出口の状況は、昨年9月の観測時とほとんど変化しておらず、昨年秋以降にA・B・C噴出口から新たな泥の噴出があったとは考えられない。A噴出口の温度は16℃、C噴出口では20℃で、B噴出口は埋まっていた。これらの噴出口からの火山ガスの噴出は全く認められない。

新噴出口は、旧C噴出口からN17°W方向60mの地点にD噴出口が、さらにD噴出口からN37°W方向に10mの地点にE噴出口が形成されている(第1図)。D噴出口の直径は1.1mで、泥の湧出はすでに止まっていた。噴出口の周りの泥質堆積物の厚さは7cmである。噴出口には泥水が溜まり、その温度は18℃で、盛んに無色のガスが泥水から沸き上がっている。E噴出口では径約3.5mの泥水プールができ、中央から水蒸気と硫黄臭の強いガスが伴って、盛んに泥水が湧き出している(第2図)。観測できた泥水の最高温度は93℃で、湧き出し口での温度はさらに高いかもしれない。泥質堆積物には白色変質安山岩の細粒火山礫が混じっている。また、基質部を水洗後、顕微鏡下で観察しても、本質物と見られる火山ガラス片は含まれていない。

沼ノ平火口底の西縁と東縁では噴気活動が活発で、噴出口には硫黄の昇華物ができている。噴気の温度は、西縁で100℃、東縁で97℃であった。同行した地元登山ガイドの談話によると、東縁の噴気活動は昨年の夏以降に出現、活発化したそうである。

沼ノ平火口縁からの観察は6月3日まで継続したが、火口底の状況に大きな変化はなかった。また、6月23日に火口底に降りた地元登山ガイドの報告によると、火口底の状況は5月26日と比べ大きな変化はなく、E噴出口での泥水噴出は継続中とのことである。

4. まとめ

沼ノ平火口での泥噴出は昨1996年秋には一時的におさまったものの、今年に入って新たな位置で再開している。しかも、噴気活動域は昨年よりも明らかに拡大している。今のところ昨年9月1日のような小爆発は起きてはいないものの、新噴出口は登山道のすぐ脇にあり、十分な注意が必要であろう。



第2図 E噴出口での泥水噴出。

Fig. 2 Fountaining of muddy water at E vent.